



美しい空と海を満喫



メンテナンスも練習のうち

1年の森陽介君は「慣れない調理に閉口した」と言いますが、「美しい海や島影は全ての苦勞を吹き飛ばしてくれました」とも。同じく1年の小林翔介君(エネルギー化学)も、「天気図を書いていたらひどい船酔いに。でも、夏クルージングは人生最高の思い出です」

創部50周年の節目を迎え 「フランスへ」を合い言葉に一致団結

ヨット部では週末以外にも2年生以下の陸上トレーニングを行っています。「多摩川の河川敷を二子玉川辺りまで走って、腕立て、腹筋、背筋を行ってから戻ります」と、保田卓哉君(電気電子2年)。「1年生を指導することで、自分自身に上級生としての良い意味での自覚が芽生えます」とのこと。

また、日々の練習で技術や体力の向上に努めることに加え、アランフェス号を管理するという大切な仕事もクルーの役目。「この船は今14年目。老朽化していますが、欧米では20年、30年と乗り続けることも少なくありません。僕らも愛情を持って艇と接し、しっかりメンテナンスしていきたいと思っています」と、艇体管理と整備を担当する機械工学科2年の後藤一樹君。福岡君が「船の至る所に、僕たちや先輩たちの思い出が染みついていますから」と続けると、その言葉にみんな大きく頷きます。

さてクルージングと並ぶ部活動の大きな柱が、レースへの参加。決められたコースを周回しながら順位を競うもので、他のヨットの前に出て風を遮るなど、速さというより、臨機応変な判断

力が勝敗を左右する頭脳戦です。

都市大ヨット部では、ANIORU'sカップに向け、2月に2度の強化合宿を行うなど、最終調整に入ります。

今でこそ部員数13名と安定していますが、福岡君たちが1年生で入部した時、ヨット部には4年生しかおらず、その翌年(2009年度)のカップには最高学年として臨むこととなりました。「先輩がいないのも大変でしたが、一番つらかったのは、レース合宿中の雪。寒いどころか、

全身凍りました」と笑うのは、情報科学科3年の堤綾音さん。「でも、泣きたいくらい苦しいことの方が、後になって宝石みたいに心の中で輝くんですよ」

結果、昨年度のカップでは総合5位に終わりましたが、「予選レースでは1番にもなったんです。大学に入って、初めてヨットに触れて、そして1番になれたことは、たとえそれが予選であっても素晴らしい成功体験です」と熱っぽく語るのは当時1年だった都市工学科2年の大石純矢君。確かに、その戦いぶりは、上級生を欠く中、上出来といえるのではないのでしょうか。

ANIORU'sカップの優勝校は、フランスでのヨットレースに参加することができます。都市大はまだ一度も優勝経験がありませんが、福岡君は「今年度は、昨年の経験者が揃っているので、優勝を目標にがんばりたいと思います」と、主将らしく力強く宣言してくれました。

創部50年の節目の年、「フランスへ!」を合い言葉に、持ち前の団結力をさらに強める都市大ヨット部。その輝かしい航跡を私たちも見つめ、応援したいと思います。



主将の福岡達也君は、「出航したら、必ず何か大切なことをひとつ学んで帰ることになるんです」



「ヨットは女性も楽しめるスポーツ。洋上に出ると、自然に力がわいてきます」と、堤綾音さん。



「3年生なしでも船を出せるようがんばりたいですね」と、体育会連絡員兼主務の大石純矢君。



ANIORU担当の保田卓哉君は、「部内はもちろん、他大学との付き合いで人間の幅が広がります」



「愛情を持って船と接すると、船もその気持ちに応えてくれます」と整備担当の後藤一樹君。



調理が苦手の森陽介君は、「料理はやっぱり食べる方が得意です。早く1年生入ってこないかな」



入部の動機は、「風が心地よくて」と、詩人のような小林翔介君。実は試乗会のBBQにつられたとの噂。